

月山山麓農用地開発による 畑作営農団地について

山形県藤島農業改良普及所

菅 原 茂

農用地開発事業のあらまし

山形県月山山ろく北周部に位置する 651 haを開発して近代的な営農を行なう目的で計画され、昭和35年度に、特定農地開発事業予備調査として調査が始められ、また昭和41年度までに国営パイロットの調査をへ、昭和42年度から昭和43年前半にかけて検討を重ね、全体設計が完了した。さらに、昭和43年10月1日にも着工された。しかしその後、農業をとりまく諸情勢や、受益者の希望などもあって、1部変更となり、農用地造成面積は641.5 haとなり、その戸数は1,053戸である。

この農用地造成地域は東田川郡羽黒町で、1部榎引町にまたがっている。また、その受益者も当然、羽黒町の

やたばこなどの作物が作付されている。昭和52年度に農地の造成、附帯施設も完了し、昭和53年に換地の終了とともに、本格的な畑作営農にとり組まれた。

団地の特徴

この団地の傾斜度は1～8度の緩傾斜で、ほ場の1区画はおおむね70aで、大型のほ場である、また、当地方では砂丘地帯を除けば、灌水施設がほとんど整備されていないが、この団地では、完全に整備されている。

すなわち、上流にダムを建設し、これから取水し調整水槽に送水される。調整水槽から自然圧により32プロットに分かれる。ほ場での灌水は、バルブ操作でスプリンクラーが始動し散水される。灌水は1日5mm、間断日数6日、その効率が75%で、1回の灌水量は40mmである。

さらにこの地域は、気象的に砂丘地や平野部よりも、夏期間に恵まれていることである。表2の気象表のとおりであるが、年平均気温11.8℃、降水量2.432mm、晩霜が4月22日、初雪11月20日、終雪が4月11日、根雪期間は110～120日である。

団地の現況

この団地は地権者、借受者あわせて158戸の農家である。これらの農家の大部分は、水田を主体とした経営型態であり、畑作に対する経験がとぼしく、畑作物の栽培は、全く初めてという農家も少なくない。また土壌条件も、造成まもない未熟畑で、しかも強粘質で表3に示すとおり磷酸吸収係数が高く、磷酸の非常に

表1 団地別造成面積および作物別作付面積

用地別	地区面積	造成面積	造成面積の内訳				作物別作付面積					
			農地	耕作道	排根数	その他	牧草	柿	たばこ	アスパラガス	水稲	計
11	375.1ha	370.0ha	350.8	7.3	6.6	5.3	210.4		50.0	77.4	13.0	350.8
12	95.6	95.1	90.1	1.3	3.7		76.7	13.4				90.1
13	47.4	47.0	41.4	0.4	5.2		41.4					41.4
14	82.1	81.1	71.4	0.8	8.9		71.4					71.4
15	49.3	48.3	38.4	2.5	7.4			38.4				38.4
計	649.5	641.5	592.1	12.3	31.8	5.3	399.9	51.8	50.0	77.4	13.0	592.1

農家が大部分で、1部が他町の農家である。各団地別造成面積および作物別作付計画は表1のとおりであるが、以下、11団地の畑作営農団地について述べることにする。

畑作営農団地のあらまし

この団地は表1の11団地で、たばこ、アスパラガスの作付を計画されたところで、鶴岡市より東南に15km全国的に有名な山伏と信仰のお山、磐梯朝日国立公園のうち出羽三山の表登拝口羽黒山の西南に位置する標高約150～200mで、120haの畑団地である。

造成の着工は昭和48年で、昭和49年には造成の終わったところを一時、利用地の指定を行ない、加工トマト

少ない土壌であり、さらに、石や礫の多いところもあって、除石しなければ、耕起もできず、もちろん作付不能のほ場のところもあった。総面積120haであるが、道路

図1 11団地(畑団地)の略図

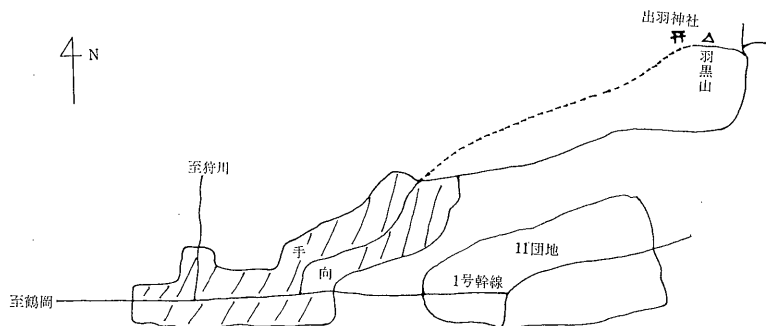


表2 気象表(平年) (黒羽町手向観測地)

項目	月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平地気温℃		0.1	0.0	2.7	10.0	15.7	19.2	23.2	25.1	20.3	14.0	8.5	2.9
最高気温℃		2.8	2.9	6.4	14.9	21.3	23.7	27.2	29.6	24.7	18.5	12.4	5.8
最低気温℃		-2.5	-2.7	-1.1	5.0	10.1	14.5	19.2	20.6	15.8	9.5	4.5	-0.1
降水量mm		304	188	135	106	120	104	248	183	210	202	278	354
日照時間h		43.6	96.6	155.6	187.1	227.3	208.1	206.7	233.5	169.8	142.9	68.3	44.7

やその他用地を除いた畑面積は約110haである。

前述のとおり、昭和53年より全面的に作付が行なわれることになったが、まず、

石礫の除去、堆きゅう肥の施用や土壌改良資材の施用による土づくり、また、深

耕、碎土など非常に苦勞して作付されておったようである。その結果、作付不能地も見られたが、たばこ、加工トマト、大豆、アスパラガスの育苗など、初年目とは思われない好結果をもたらしている。

2年目の本年は、さらに土づくりに力を入れ、たばこ、アスパラガス、ばれいしょ、大豆、加工トマトなどを中心に作付され、畑の利用効率も高まり、その生育も非常によく、造成まもない畑とは思えぬほ場になって来た。

畑作振興モデル地域に指定

山形県では、全国にさがかけて、昭和53年度より3ヶ年計画で、山形県畑作振興400億円達成事業を展開しているが、この事業の畑作振興モデル地域として、昭和53年度県内2ヶ所のうちに、この団地内の玉川畑作振興集団が指定され、なお一層の拍車がかかって来ている。

モデル地域では、実践農家を選定し、団地内で将来と上げられると思われる作物の作付体系などを実践し、その結果により、全団地に波及させるよう実施中である。その1部を紹介する。

まず、この団地内の経営指標としては、いろいろなケースが考えられるが、大きく次の3つに分けている。

1. 水田2.5ha+畑作1.0ha+花き0.3ha
2. 水田2.5ha+(繁殖豚10頭, 肥育豚150頭+畑作1.0ha
3. 水田2.5ha+畑作1.0ha+マッシュルーム(59.4m²×2棟)

畑作については、永年作物のアスパラガス(本年定植)のほか、たばこ、加工トマト、大豆などが作付されているが、今後、これらの作物を中心として、さらに振興作物の選定にせまられている実情にあるとともに、労働力の配分や、造成直後だけに、まだ問題にはならないが、将来発生が予想される連作障害なども考慮しながら輪作体系を策定し、その1例を実践農家が実施している。

今後の問題点と課題

はじめにも申し上げたが、この団地は、アスパラガスと

表3 土壌分析の結果 (昭和53年9月)

PH(H ₂ O)	P吸	CEC	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MgO	塩基飽和度	MgO/K ₂ O	CaO/MgO
6.4	1,870	21.4	Tr	14.1	498	70	100.7%	11.57	3.92

表4 振興作物の選定と作付の組合せ

年	53	54	55
1	加工トマト	夏だいこん 小 麦	短根にんじん
2	大豆	夏だいこん 小 麦	レタス
3	夏だいこん 小 麦	短根にんじん	大豆

たばこの計画であった。しかし、たばこについては、現在約20ha作付されており、増反の希望も強いものがあるが、その情勢は非常にきびしい。アスパラガスについては、約17ha本年に植付けされ、さらに今後増反の希望も多く30haの計画である。また、加工トマトは約3haであるが、これもたばこ同様に増反の希望があるが、その情勢もまたきびしいものがある。

したがって、これらの作物以外に、新たに作物を選定するとともに、輪作体系もふまえた検討を急がなければならない。

前述したとおり、造成まもないほ場であるので、今後とも深耕や堆きゅう肥、土壌改良資材の使用による土づくりをさらに推進するとともに、堆きゅう肥の確保をはかる必要がある。これについては、町内の畜産団地との話し合いにより、確保できるよう働きかけをしているがその見通しも明るい。

本年は栽培を始めて2年目であり、モデル地域の指定により、栽培農家の畑作物生産意欲も急速にもり上がっているため、今後に期待されるところが大きい。

土地条件については、排水不良地もあり、排水溝の整備や、今後、生産物の流通対策、さらに組織の一層の強化をはかりながら、おりにふれ検討し、羽黒山に登る石段を一步一步ふみしめながら、よりよい畑作生産団地になるように期待したい。